
とびらの前で

293

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とびらの前で

【Nコード】

N1746K

【作者名】

293

【あらすじ】

都会のまんなかへん、東京ドーム2〜3個分の敷地内にある私立高等学園。ここは金髪変態紳士な王子やお硬いツンデレ眼鏡、鬼畜生徒会長に泣虫会計など、個性あふれすぎな男子が集う男子校！そんな学園にまあ平凡な男子、庭吉が転入してきて…？

人物紹介 (前書き)

随時更新していきます

人物紹介

庭吉 にわよし 佑 ゆう > 1 - B <

> i 5 2 1 3 — 8 5 7 <

5月16日 / A型

本作の主人公で、父の転勤を理由に綾白学園に転入してくる。普通の男子生徒として学園生活を送りたいと切実に願っている。ほとんどツツコミ役。

二階堂 にかいどう 怜衣 れい > 3 - A <

> i 5 2 6 4 — 8 5 7 <

6月5日 / O型

英国と日本のハーフ。

ノ！天気とみせかけて、優しい一面もまじめな部分もちゃんとする。成績は常に学年トップだが、これといって努力はしていない。ただし変態紳士。

咲奈 さきな 氷馬 ひょうま > 1 - B <

> i 5 2 1 4 — 8 5 7 <

6月11日 / B型

美人（童顔）な見た目とは変わって、クチが悪い。

佑のルームメイトで、現在大学生（男）と交際中らしい。

めんどくさがってはいるが、他人に感謝されることは好き。

でも、自分のやっていることを邪魔されるのは気に障る。

将来はファッションデザイナーを目指していて、他人を着飾るのも好き。

狐猫 くみょう 秋 あき > 3 - A <

> i 5 2 3 8 — 8 5 7 <

2月15日 / AB型

今期生徒会長。糸目。

人当たりがよく気品があり、いつも笑顔でいるため、生徒や先生たちから慕われている

…が、黒い部分ももっていて、ヒートアップした二階堂を怒鳴ったりすることもある。

あやしろ
綾白 こうじ
光司

綾白学園の理事長。28才。

気さくな性格で、副理事の目を盗んでは仕事を抜け出して生徒と話込んでしまう。

そのため生徒たちからは親しまれているが、副理事のストレスの大半の原因でもある。

イベントや行事が大好きで、日程に隙があるとすぐ埋めてしまう。

のちよたぐみ
後寄巧

綾白学園の副理事。28才。

理事長とはかわって、与えられた仕事は端から片付けていくタイプ。キツチリした性格だが意外と面倒見のいい一面も持っている。

理事長に対するスルー技術に日々磨きをかけている。

第1話 普通に考えて、まず無理

「……で……っけえ……」

ここは、多分都会のまんなかからへん

東京ドーム2〜3個分の敷地内に建つ金持ち高等学園……

私立、綾白^{あやしろ}学園である。

綾白高校は一応この辺では一番頭のいい学校で……

中学時代成績が中の上程度だった俺がこの学園の門前に立っている理由は

……まあ……はつきり言って無い。

いや、無いことはないんだけどさ！

って俺誰に言い訳してんだ！

心の中で一人ツツコミをしながら「うあー」と頭をカシカシと掻いて、もう一度建物をキツと見上げる。

「……と、とりあえず入るか……！」

自分に言い聞かせるように呟き、無駄に煌びやかな学園の門をくぐった。

……門をくぐってから大分歩かされたと思う。

どのくらい歩いたか：なんて、考えるのも馬鹿馬鹿しくなってきた頃に生徒玄関に到着して、ふうとひと段落の溜息を吐きながら靴を脱ごうとして、そういえばここ土足だったな、とか
事務室のおじさんの対応の良さにこっちが焦ってしまったりだとか
カフェテリア、なんて響きのいい食堂があるんだなあとか
辺りをきよるきよるしながら、たまに壁にかけてある生徒作品の絵画や案内をみながら、ゆっくりと廊下を歩いていく。

「あー…、ここか」

ふと、大きくて少し威圧感のある扉の前で立ち止まり
ここが理事長か、と扉を見上げる。

…目を閉じて深呼吸一回

右手にぶらさげていた新品の革靴を左手に持ち替えて、もう一回気
を入れるように息を吸う。

そして開いた右手をスツと扉の前に出し、コンコンと軽くノックを
する。

すると、重い扉の向こうから随分と軽い返事が返ってきた。

「入っていいですよー」

「あ、し、失礼します」

扉のノブに手をかけて、ぐっと押してみると
見た目よりはいくらか軽い感触で扉が開いた。

そして、中にいる人物をふたり見つけて、少し緊張しながらそこへ
歩み寄る

「庭吉にわよしくん？」

歩み寄った俺の目の前に立ち、首を傾げて聞いてくるこの人は薄い金髪でまだまだ若そうに見えるけど…

多分理事長なんだろう。

…多分。

「はい、今日から転入することになっている庭吉にわよしゆう佑です」

できるだけハキハキとした声で答えると、理事長らしき人はくすつと口に手を当てながら笑い

俺の右肩に手をポンとのせて…

「うんっ！元気があってよろしいっ！！」

「…へっ？」

「君みたいな可愛い子ならいくらでも歓迎するよ！」

「はっ？」

え？

何このパワフルな理事長？

俺が緊張していたことも忘れてぽかん、と口を開けていると、後ろに立っていたもう一人がスツと理事長の前に歩み寄り…

「可愛いさは武器だよ！俺は顔とか家柄とかそういうのを大事にし

て

「理事長！！」

「いだあああああ！？」

スパアアン！！といつの間に持っていたのかわからない厚い本で理

理事長の頭を叩いた。

その人は、薄いフレームの眼鏡に黒髪を軽く七三にした、見た目的にはキツチリした人だった。

先程のとても爽快な音に、俺はハッと我に返る。

そして目の前に叩かれた頭を抱えてしゃがみ込んでいる人物を捉え、慌てて駆け寄り、その背中に手を乗せ、顔を覗くようにして尋ねる。

「理事長、大丈夫ですか？」

「いづうう…ひっどいなあ後寄のちより、ただの挨拶なのにい」

「先程のは挨拶ではなく独り言でしょう！」

「ううー！」

「ううーじゃないっ！！！」

スパンツ！！

お、鬼だ…鬼がおる…

でもまあ理事長も理事長だと思っけど。

男子生徒に向かってかわいいだの顔や家柄がうんぬんだの言っただし…

この人ほんとに理事長なのか？

…って！

「わっ…」

しばらく頭を抱えてむくれていた理事長が急に何か思い出したかのように立ち上がったのに驚きつつ自分も立ち上がると、理事長はこちらを振り返りにこにこしながら言った。

「そつだそつだ、庭吉くん、改めて自己紹介するよ！」

僕はこの綾白学園の理事長をやつてる綾白光司あやしほこうじです、よろしくね」

そつ言つて手を差し出してくる元気な理事長に応えるように、握手をする

「あ、はいっ！よろしくお願いします」

良い雰囲気を持った人だな、と素直に思った。

こんな人が理事長だつて言われて、内心大丈夫なのかとも思ったけど。

「んで、この七三眼鏡は後奇巧のちよびたくみね」

「はあ…まあ、いいでしょう」

君、私は学園の副理事を務めているので、何かあれば言うように」

俺が反射的に軽く頭を下げると、この低脳理事よりは役に立ちます、と理事長に聞かせるような口調で付け足した。

後ろで理事長が地団駄を踏みながら「副理事のクセに！少しは言動を慎め！」と怒っているのはまるで聞こえていないようなしれっとした顔で眼鏡のブリッジを軽く押し上げ「では…」と話を続ける。

「君は寮に入ることになっていたね」

「はい、そうです」

「では場所を案内するからついてきなさい」

「はい！」

「ここから始まる、俺の学園生活。」

転入の話も急だったけど、まさか綾白に来させられるとはおもって
ませんでした父さん。

金持ちと天才がいつぱいいるこんな学園で、俺が無事に 平凡に
通行人Aさんみたいに

普通に生活していけると思いますが、父さん？

とにかく

早くここに馴染んで

勉強にもついていけるよう

普通でいられるよう

がんばりたいと

…切実に願っております父さん。

第2話 貴重な休日

「……い……おい……」

「んー……」

誰だよ……今日は休日のはずなのにうるさいなあ
もう少し寝かせ……

「起きろハゲエエエ!!」

「ハゲじゃねえええ!!」

怒りを帯びた声を上げるとともに俺にかかっていた布団を勢いよく
全て捲り上げた主の方へ顔を向ける様に、ガバツと身体を起こすと……

「……誰？」

そこには眉間にシワを寄せた、見覚えのない恐ろしい人物の姿があ
った。

ゴスツ……。

「い……っだあい……!？」

なにゆえなぐる!？

「だあほ!お前のルームメイトだ馬鹿野郎!!」

「あ……あー」

そうだった。

俺は昨日綾白学園に転入してきた…

副理事に寮を案内してもらって、そこは二人で一部屋ってところで、
それで…その、えーと…

この人の名前は確か

そうだ

「咲奈？」

「そーだよ、ようやく頭も起きたか？」

一発で効かなかったらあと四、五発はやってたぞ」

ふう、と何故か達成感に満ちた顔で俺を殴る為に捲った服の袖を直
しているのは、俺のルームメイト咲奈氷馬。

見た目は男にもモテそうなくらい（いや、実際現在男と交際中らし
い）美人なのに…性格とクチの悪さと言ったら…

「あ？お前今なんか言ったか？」

「いい、言つてない！

ところで、何で起こしたんだ？今日日曜だよな？」

「ああ、さっき二階堂にかいどうの奴から電話が来て…」

そう、それは庭吉が起きるたった数分前のこと。

）
）
）

『おーやつと繋がった！』

なんで一発で出ないんだよ！』

「…おやすみ」

『わー待て待て！』

こんな朝っぱらからかけてきて詫びもしねえとは…

「…で？」

『お前のところに昨日ニューフェイスが来ただろ？』

「庭吉のことか？」

そういえば昨日、転入生が俺と相部屋になった。

庭吉佑、とか言ったかな

部屋に来て挨拶済ませて、荷解きもしないですぐ寝やがったからなんも話してねえけど…

『にわよしっていうのか！』

「で？」

『そのにわよしってのに今から会いに行くから起こしてー！じゃーなー！』

「え、おいまして二階で」

ピッ

ツー、ツー、ツー…

は？

その通話相手は、こちらの都合なんてまるで無視して通話を切ってしまった。

「今から来る…だと…？」

何言ってるんだこんな朝っぱらから！」

でも

あいつを無視したらまた厄介なんだ。

今だってこっちに向かっているらしいし、もうしばらくしたら、今度は部屋のドアをノックする音が鳴り止まなくなるだろう。

それもまたうざりたいと思い、「あーもう！」と諦めた様な声を上げてベッドから降りると向かいの庭吉のいるベッドへとゆっくり近付き

「つーわけだよほら起きろハゲ」

「いやいやいやわかんないハゲじゃない」

「いいから頼むから起き」

コンコンコン

「あーきやがった！お前今すぐベッドから降りろ！いいな、俺が出るからお前そこ座ってるよ頼むから…！」

「え、え、待って顔も洗ってな」

俺の話も聞かずにドアへと向かっていく咲奈に自分の意見を通すのを諦め、指定された場所に座る。

ガチャ

「…よう」

「おはよう咲奈！元氣そうだなによりだよ」

「てめーのおかげでピンピンだコラさつさと入れハゲさみーんだよ」

「ふふ、咲奈くんは相変わらず口が悪いですね」

「あ？生徒会長さんも一緒か」

「いえ、僕は彼に無理矢理…」

咲奈の背中ドアの向こうにいる人物が見えないけど、どうやら電話の先輩と生徒会長がそこにいるようだ。

こんな時間に何の用だろう。

…ハッ！転入生インタビューとか！？

「あ、どうしよ咲奈俺、やっぱり身支度を」

「おおっ！…！」

「うえっ！？」

俺がおろおろと慌てながら立ち上がると、ドアの向こうにいた先輩たちから姿が見えたのだろう。

綺麗な黄土色髪をした先輩がこれまた綺麗な緑色の目を輝かせながら、まるでバビュン！と効果音がつきそうなくらいの速さと食いつきで咲奈の横を抜け俺に近寄ってきた。

そして慌てて手を上げて、行き場がなくなっていた俺の手をとり、

両手で包むように握ると…

「君が転入生？」

「は…あ、はい…」

「ほー…！」

その先輩は、まるで品定めをするかの俺を上から下へ、下から上へとじっくり見ている。

…なんだか恥ずかしい。

なんだ、この異様な緊張感は…？

そして、手を握ったままの先輩とはた、と目が合う。

「…あ、の」

「…いい！」

「え？」

「すごくいい！」

「は？」

意味がわからない。

目の前の先輩は何か面白い玩具を手に入れた子供のようにしゃぎながら俺の手を上下にブンブン振っている。

…一体何がいいっていうんだ？

俺が困り果てた顔で先輩を見ていると、いつの間にかドアを閉めてテーブルの前に座っていた二人が声をかけてくれた。

「こら、怜衣…庭吉くんが困ってますよ」

「転入生がおめーのテンションについてけるわけねーだろー？」

「え？」

二人の言葉を聞いた先輩は、ふと自分の目の前にいる困り果てた顔をした転入生に改めて目をやる。

「…あの、手…手を…」

「お？あ、ごめんごめん！」

君…庭吉くんがあまりに美人さんだったか

「怜衣^{れい}？…座りなさい、ね？」

「っわ…わかったよう…」

生徒会長さんがそう言つと、先輩は俺の手をパツと離して、しょうがないな」と溜息をつきながら、それでもどこか楽しそうな表情でテーブルの前に腰をおろすと「庭吉くんも座つて」と、まるで語尾にハートや音符でもつきそうなくらい親しみのこもった言い方で自分の隣をポンポンとたたいた。

俺は先輩の言動とテンションに戸惑い、人一人分くらいの距離を置いて隣に座つた。

「えー遠い！もっと近くにカモン！肩を寄せ合おう庭吉！」

「えっ」

「ふっーだろうが黙れコラ！！」

「まあまあ二人とも落ち着いて…」

まだ7時にもなつてないこんな時間から騒ぐなんて、修学旅行以来かもしれない。

他愛のない話はこれくらいに…と場を落ち着かせるように生徒会長さんが言つと、二人はお互いを見た後に渋々姿勢を正した。

さすが生徒会長さま…？

「…では、こちらの紹介からさせていただきますね」

「あ、はい」

「僕はこの学園の今期生徒会長を務めさせていただいてます、くみょう狐猫秋あきといいます…以後、お見知りおきを」

「こ、こちらこそいろいろお世話になるかもですが…」

と言つて軽く頭を下げる。

品のある人だな、と一目見て思った。

話し方にまで品が表れてる、きつと良い人なんだろうなあ…と、思った直後。

「俺は二階堂にかいどう怜衣れい！よろしくな、庭吉！

何かわからないことがあつたら言えよ？

俺が…手取り足取り腰　　！」

ゴッシャアアアア！！！！

「っ！？」

二階堂先輩の言葉を遮る様に、くみょう狐猫先輩が向かいに座る彼の頭を一瞬で鷲掴んだと思うと、そのまま勢いよくテーブルへと掴んだ頭を押し付けた！

「だ、大丈夫ですか！？」

「いいんですよ庭吉くん、こーんな頭の大半が変態で出来ている様な底辺人間なんか、あなたの情けをかける価値もないんですからね？」

「ひ…ひどいぞ秋^{あき}…」

生徒会長恐るべし…！

一方ひどい仕打ちを受けた二階堂先輩の方は、うーと唸りながら痛そうな顔をさすりながら身体を起こした。

この人は喋らなければ格好良いタイプの人だな、と思う。

見た目的には黄土色の明るい髪や緑色の瞳は綺麗で、英国の人の血がはいっているのだろうか…と思ったし、整った顔立ちをしていて、絵になる人だなとも思った。

そんなことを考えて、いつの間にか先輩が俺の視線に気付いて、ほんの少し頬を染めながらこちらをじっと見ていることに気づき、我に帰った。

「あ…っあ！ごめんなさい…！」

自分のしていたことに気づき、顔が熱くなっていくのを感じる。

男相手に、見惚れてしまった…！！

俺が顔を赤くして俯いていると…

隣に座っていた先輩が少し距離を詰めて…そっ、と頭に優しく手を置いた。

「へっ…」

「はは…いいよ、謝らなくて」

その声を聞きながら隣を見上げると、二階堂先輩がまるで子供を愛でるような笑顔でこちらを見ていた。

「な…ちょ、やめてください!」

突然のことに驚き、バツと手を振り払う。

「あはは、ごめんごめん!

でもやっぱ可愛いなあ!これはいいものを見つけた!」

「なっ…」

可愛いなんて、言われて嬉しいものじゃない! 拳げ句にも扱いはなくて、ひどすぎる!!

俺がまだ赤いままの顔で先輩をキツと睨むと、俺が口を開くより早くに、様子を見ていた狐猫先輩がやれやれといった表情で口を挟んだ。

「こら怜衣、あまり転入生をからかうものじゃありませんよ」

「な…からかったつもりはないぞ?」

そう言いつつ俺の顔色を確かめる様に覗き込んだ先輩は、俺が何故怒った顔をしているのかわからない、と言うように目を丸くしている。

その表情に、俺はますます怒りが込み上げてきた。でも

「充分からかってんだろーがハゲ」

「ハゲてなーい!」

と、またまた俺が口を開く前に、今度は咲奈が口を挟んだ。
先輩は咲奈の方へと顔を上げ、俺から離れた。

咲奈と二階堂先輩が言い合いをしているのをなんとも言えない表情で見ていると、いつの間にか近くに来ていた狐猫先輩が俺に話し掛けてきた。

「…どうやら怜衣が、ご迷惑をかけてしまいましたね」

「あ…」

「底辺人間の代わりに謝らせてくださいね」

そう、申し訳なさそうな表情で俺の顔色を伺ってくる先輩に、俺は慌てて応える。

「い、いえ！狐猫先輩くみね先輩が謝ることじゃ…！！」

二階堂先輩が悪気があって言った訳じゃないのは、わかってる。ただ、昔から可愛い、だとか…そういうことを言われるのがどうしてもイヤで、ついカツとなってしまうただけで…

それを口に出そうとして、口をぱくぱくさせていると、テーブルの向こうで言い合う二人のヒートアップしてきた声が耳に入ってきた。思わずそちらを向くと…

「だーかーらー！！お前は どうしてそんなに口が悪いんだ！！」

お母さん悲しいっ！」

「だーれがいつてめえの息子になったよ！ああ？！」

「もっと可愛くできないのか！その童顔でその性格は詐欺に値す

」

「だーうるせえ！やんのかてめええ！！」

今まで距離は近かったものの、言い合いで留まっていた咲奈の顔は既に怒りに捕われているようで、その手が半無意識に二階堂先輩の胸倉を掴んで…

「!?二人ともつやめ」

俺が言い終えるより早く狐猫先輩が二人のもとへ跳んでいき

ゴンツ、ゴンツ…

「いづああッ!!」

「いい加減にしないで二人とも!むいて吊しますよ!」

む、むいて吊す!?

普段丁寧な言葉遣いをする狐猫先輩の口から「底辺人間」とか「吊す」なんて言葉が出てくると普通より怖さが倍増するんですが!

頭にげんこつをくらった二人はうーと唸り声を上げながらお互いに身を離して、座り直す。

「まったく…二人とも大人になってくださいよ」

特に怜衣れい、と付け足して二階堂先輩を睨んだ後に溜息を一つついてさらに申し訳なさそうな顔を俺の方へ向けた。

「すみません、ご挨拶に来ただけなのにこんなに騒ぎ立ててしまっ
て…」

「あはは…」

「それじゃ、私たちはこれで失礼しますね」

「え、まだ本題にはいってないよ秋！」

「これ以上庭吉くんを混乱させても悪いでしょう！今日は、これで失礼しますからね」

では、朝早くから失礼しました、と軽く頭を下げながら立ち上がり、まだ何か言い足りないといった顔をした二階堂先輩を引き連れて部屋をでていった。

「まったく…あいつほんとノー天気だな…」

「あ、あはは…」

咲奈は二人がでていったドアを睨み、さて、と立ち上がりベッドに向かっていく。

「んじゃ、せつかくの休日なんだから俺はもうちょい寝るわ」

「うん、おつかれさま」

苦笑いしながら布団を頭まで被る咲奈に労いの言葉をかけると、「んー」と、何とも思っていないような喉を鳴らすだけの返事が返ってきた。

その返事に何故か優しさを感じて、クスツと笑ってしまう。

…さて、俺はこの初登校前日をどう過ごそうかな…？

とりあえずは顔を洗って髪にかかるワックスつけてみたりして歯も磨いて、着替えたら…

そうだな、学園内を歩いてみようか…。

第3話のんびり初登校（前編）

さあ、今日は記念すべき登校初日！

結局昨日は遠足前夜の小学生の様にわくわくして、あんまり眠れなかった。

3時間程度しか休息をとれなかった身体をぐつとベッドから起こして、隣を見る。

…向かいのベッドで寝ている同級生はまだ眠ったままだ。

俺は身体をのそのそとベッドから起こすと、まだふらつく足で彼のもとに歩み寄る。

「咲奈、起きて咲奈…」

布団が膨らんでいる部分に両手を乗せてユサユサと揺さぶりながら、彼の名前を囁くように呼ぶ。

「…あ？なに…まだ時間じゃねえ…だ、ろお…」

咲奈は朝に弱い。

会って2日とちょっとだけど、これは多分誰にでもわかることだろう。

「今日は食堂の場所とか、教室とか教えてね？」

「…なん…あ…かったから…」

そう絞り出すように声に出すと、もう一度布団を頭まで被り直してしまふ。

普段からこのくらいやわらかければいいのに、と思いつつながらクスッと笑ってしまった。

その一時間後くらいに、咲奈の携帯目覚まし起床時間を告げた。

「っ…んあー！」

その元気な掛け声（？）とともに気合いを込めたかのような勢いでベッドから起き上がった咲奈は、すでに制服に着替えおわっている俺に目を向けた。

「…はえー…」

「いや、楽しみであんまり寝てないだけだから」

あはは、と苦笑いしながらそう言うと、咲奈は「ふーん」とあまり興味なさそうに返事をして、自分も身支度を始める。

「じゃ、朝メシ行くぞ」

「あ、うん！」

いつの間にか完璧に制服を着込んでドアの前に立っている咲奈に声をかけられ、慌ててそばにある鞆を取り、彼が開けてくれたドアから部屋のそとにでた。

寮の外に出て、少し距離のある通学路を二人で歩く。

「そいやお前、同じクラスになんだっけ？」

「うん、よろしく」
「んー…」

咲奈が同じクラスにいるっていうのが凄く嬉しくて、ついつい足取りも軽くなってしまう。

「おい…小学生じゃあるめーし、もう少し落ち着けて」
「あ…ご、ごめんー！」

そう謝りながら咲奈の顔をチラと覗くと、少し怒った口調とは違って、どこか楽しそうに前を向いて歩いていった。

カフェテリアで朝食を済ませた後、咲奈に教室へ行く前に職員室の場所を教えてもらって一旦別れた。

俺は転入生だから、初日は教師と挨拶をしなければいけない。

職員室の引き戸が少し開いているのを見つけて、そこから覗くようにして中の様子を伺っていると

「おはよう庭吉！」
「なっっ！！」

突然、誰かに後ろから俺の身体を囲うように抱きしめられた。

あまりに唐突な出来事に状況把握が出来なくなり、口を開けたまま

固まると、プツ…と小さく吹き出すような声が聞こえた。

「あはは、俺だよ」

その呑気な声の主を確かめるために、動かしづらい首を少し後ろに向けるとそこには…

「っ…に…二階堂先輩…！」

先輩は、「あつたりー」と朝からテンションの高い挨拶をすると、俺から身体を離して改めて、といった感じで口を開いた。

「何してるんだ？先生待ち？」

「はい、今日が転校初日なので…」

「…」

「…？」

何故このタイミングで沈黙！？

俺、何か気に障ること言ったか！？

俺の目をじっ…と見たまま黙り込んでいる先輩に「あの」と声をかけようとした瞬間、彼は左手を自分の顎に当て、困ったように口を開いた。

「…危険だな」

「は…？」

「庭吉みたいな純粹で童顔なやつを1・Bに置くなんて…理事長は何を考えてるんだ…」

その声はまるで独り言のように、自分に聞かせるようにして消えていく。

「…？あの…」

……。

「…なーんてな！別に庭吉が童顔で天使のような美しさだからって誰もいたずらなんか」

「庭吉佑くん、待たせたね」

「あ、先生！」

二階堂先輩の言葉を聞き終わるより早く先生が職員室から現れて、教室に向かうから、と声をかけてくれた。

「じゃあ先輩、俺行きますね」

先輩の言ってることは聞こえてたけど、くだらないことだと思い、手早く切り上げて廊下の少し先にいる先生の方へ歩き出す。

「…庭吉！」

「？」

急に真剣味を帯びた声で呼び止められ、先輩がいる方をもう一度向くと…

「放課後でいい、庭吉の時間が余った時間でいいから…」

カフェテラスに、来てほしい」

「？良いですけど…なん」

「話！話がしたいだけだから、そんじゃーな！」

絶対来るんだぞ、と語尾に付け足して、手を振りながら反対方向に歩き去って行く先輩の背中を見ながら、話ってなんだろうと考えて…とりあえず今は先生を見失わないようにしなければということを書いて、慌てて前を向き直した。

後編へ続く

第4話のんびり初登校（後編）

「 よつ 」

「 つわ…咲奈 」

「 どうした頂垂れて 」

「 あー…あはは 」

机に突っ伏して腕まで垂らすようにして頂垂れていると、鞆を机に置いて隣の席に座っている咲奈に背中を叩かれた。

ゆっくりと身体を起こして生気の薄れた顔を咲奈に向けると、苦笑しながら頭をポンポンと労うように撫でてくれた。

今朝先生に案内された1 - Bの教室。

俺に用意された机の場所は窓側の一番後ろ、の一個隣。

窓際の席には咲奈が座っていた。

現在教室には誰もおらず、電気が点いているだけの教室に二人だけ。

何故転校生は教室の教壇の上に立って自己紹介をしなければいけないのだろうか。

何故生徒全員に注目されながら自分の趣味や意気込みを語らなければならぬのか。

そんなことをもやもや考えて、また机に頂垂れる。

「頑張ったよお前、ガッチガチで顔真っ赤だったけどな」

そう言っつて、今朝の俺のガッチガチで顔の真っ赤な自己紹介を思い出したのか、ブツと吹き出す咲奈。

片手で腹を抑えて馬鹿笑いしている様が憎たらしい。

「うー…へたこいたかなあ」

「いや、いろんな意味で好印象だったと思うぜ？」

「いろんな意味？」

「そう」

「…ハア」

「だーっもういつまでうだうだ言っつてんだこのやろっ！」

「っ！？」

咲奈は呆れた様に声を張り上げたかと思うと、机と椅子に寄っかけていた両腕を伸ばして俺の頭に手を乗せ、「オラァ！」と怒鳴りながらぐしゃぐしゃに撫で回した。

「いつづつうう！ハゲる！ハゲます！！」

「ハゲてしまえ！」

ひ、ひどい！！

その強い衝撃を払いのけようと、頭の上で咲奈の腕を必死に手で叩く。

「あ」

「ん？」

俺がふと何か思い出したような声を上げて手を止めると、咲奈もつられたように手を止めて、俺の顔を見た。

「…二階堂先輩にかいどうに呼び出されてたんだった」

「は？お前が？」

「うん、放課後カフェテリアにつて」

思い出したことを口に出すと、咲奈が何か考え込むようにして俺から手を離れた。

そして、暫く黙り込んで顔をしかめた後…

「…怪しい、俺もついてく」

「え？」

突然席から立ち上がり、肩に鞆を担ぐと教室の引き戸まで歩き、呆然とする俺を振り返って

「ほら、早く行くぞ」

「っえ、あ？…う、うん！」

よくわからないけど、心配してくれてる…のか？

頭で色々考えても解決しないと解り、慌てて机にかけていた鞆をとって、彼を追いかけることにした。

「……」

「……」

…とても空気が重い。

朝食をとりに来た時も、昼食をとりに来た時だって…このカフェテリアは賑わっていたのに！

今だって放課後だし、少数とはいえ暇を持て余してる生徒がここに集まって、それぞれに会話を楽しんでいる声がここを賑わせているはず…なのに…

カフェテリアの一角、その丸いテーブルに集まった3人。

二階堂先輩がまるで「なんでお前までいるんだ」と今にも口に出しそうなくらい顔をしかめながら咲奈を見ている。

その手元には、俺を待っている間に注文したであろう紅茶が湯気もなく、水面だけが微かに揺れている。

対する咲奈は特に何を言うでもなく、先輩を睨むでもなく…ただ、そこに足を組んで、堂々とした態度で座っているだけだ。

…場の空気を変えなければ…！

俺は残り少ない生気を絞りだすように声を出した。

「…あの」

「庭吉にわきちに何か用か？」

俺が口を開いた直後に、咲奈が二階堂先輩に問いかけた。

二階堂先輩は少し驚いた顔をして、でもすぐにまた顔をしかめて…温くなってしまった紅茶の入ったティーカップを口につけたあと、口を開いた。

「…そうだけど」

「何の用？」

「…なんでお前まで来てるんだ？」

「お前が変態紳士だから」

「なっ…なんだと？」

「間違っただことを言ったか」と付け足した咲奈に、先輩がムツとした表情でテーブルに握りこぶしを置く。そして、咲奈に引く気がないのをいやそうに受け入れた後、やっと俺の方へ顔を向けた。

「庭吉、今日呼んだ理由なんだけどな？」

「は、はい」

「今度俺とデ」

ガスッ……

「いっつ…!!?!?!?!」

「!」

先輩が用件を口に出そうとした瞬間、咲奈の足がテーブルの下で…確かに、先輩の足首を強打した。

「デ…何だよ？」

「つつ、う…咲奈!!お前先輩に対して態度悪いぞ！」

二階堂先輩が席をガタツと立ち、同時にテーブルをばんつと叩く。テーブルに置かれていたティーカップがカチャンツと音を立てると、周囲で楽しく会話をしていた生徒たちの視線が一瞬にして集まってしまった。

「お前みたいなやつ誰が先輩と認めるかアホ！」

「アホじゃない！成績は常にトップだ！」

咲奈の口答えにキレる…いや、自慢し返すように、胸を張って答え

る先輩。

そんな二人を見た周囲の生徒たちは、まるで「ああなんだまたか」とでも言うように、各々の輪へと顔を戻していく。

こんなんでいい…のか？

「んな話してねえだろーがよオー！」

「ふ、二人とも落ち着いて…」

二人の間に手を出すようにして、落ち着かせようと試みる

座ったまま先輩を睨む咲奈と、歯をむき出しにして、今にも喰い掛かりそうな眼で睨み返す先輩。

…これはまずい。

昨日は狐猫先輩くみょうがいたから助かったようなものだ。

俺一人でなんとかなるものだろうか…！？

「大体お前はいいのかよ！」

「へっ！？」

先輩を睨んでいた眼をそのまま俺に向けて、咲奈が問いかけてきた。

「い、いいて…その、何が？」

「こんなやつとデートなんかして、無事に帰ってこれるわけがねえだろって言ってるの！」

「デッ…！？」

デート！？そんな話してたっけ！？

この状況からそんな言葉が出てくるなんて予想もしていなかった俺は、突然出てきたその単語に一瞬固まる。

すると、咲奈の口からでてしまったその単語に先輩がハッと少し顔を赤らめて、慌てたように言う。

「あ、ばか咲奈！バラすなよ！！」

「るせえ！言わなかつたお前が悪い！」

「おーまえが言わせなかつたんだろおおー！！」

ベーツと舌を出して、してやったりという顔をする咲奈に対して、先輩は先程よりも顔を赤くして、暫く何も言えず唸っていたものゝやがて諦めた様に椅子に腰を下ろした。

俺も、二人を止めようとした時のまま立ちっぱなしだったことに気付いて、慌てて席につく。

その様子を見た咲奈は、再び足を組み直すとふい、とそっぽを向いてしまった。

「あ、あの…デート、というのは…」

「そ、そうなんだ！してくれない、か？ツ…俺と！」

！

先輩が俺をまっすぐ見て、返事を待っている。

…俺、は……

…いやいや、おかしい。

この状況はおかしい。

女の子相手なら、この展開はあったのかもしれない

すね……」

「段階……」

「はいっ！つまり、その……デートとかって恋人同士のするもの……
だか」

「付き合ってくれるのか!？」

「っはい!？」

どーしてそうなるのオオオ!!!

先輩が俺の言葉を遮って、瞳をキラキラと輝かせて俺を見ている。

「ちょ、待つてください!そんなこと一言も……!」

「でも、段階を踏めば俺にもチャンスがあるってことだよな!？」

「え?ま……まあ、そういうことに……なっ、ちやうんですか……?」

あれ、そんな話してたっけ、と俺が焦ったような顔で困惑しているのに気付いているのかいないのか……二階堂先輩は目を輝かせたままテーブルの上に置いていた俺の手に自分の手を重ねて

「頼む、俺と……一週間、付き合ってくれ」

「……!」

先輩が、先程の演技掛かった表情から打って変わったように、俺の目を真っ直ぐに見つめている。

この目から視線を外すことは許さない、とでもいうような真剣な眼差し。

そしてその綺麗な緑色の目が、先輩が……ゆっくりと俺に言葉をかけていく。

「一週間、俺をそばで見てくださいないか？」

その後は庭吉が決めてくれて構わない、から……」

「せ…先輩…」

…ここでバツサリ断ることができたら、どんなに楽なんだろう。それができない俺はただの甘ったれなんだろうか…？

正直二階堂先輩については昨日今日の仲で、ほんとに何も知らないようなもので

でも、この真剣な目に見られて…

俺はほぼ無意識なまま、小さく頷いてしまった。

そして…しばらくして、頭が混乱して固まった俺から、咲奈が二階堂先輩の手を引き剥がして、俺の手を引っ張ってカフェテリアを後にした。

その後部屋でベッドにはいるまでのことは、正直あんまり覚えていない。

男に告白されるなんて初めてだったし、あんなに真剣な顔で見つめられたのだって初めてで…混乱してしまっていたのだろうか。

布団の暖かさに眠気を誘われながら、夢の中に落ちていく中で…

明日からどうなってしまっただろうって、そのことだけが頭から離れなかった。

第5話 二階堂先輩とは？（前）

朝、少し早めに起きる。

部屋の奥に窓と面した板張りの、一畳程度の廊下のさらに端に付いている洗面台で顔を洗って、歯を磨いて、制服に着替えたら髪を梳かす。

この後に咲奈さきなが起きて以下略。

そんな風景を早く自分に馴染ませようと、自身に感覚を染み込ませていく。

二人の身仕度が済んだら、部屋を一緒に出て、3階から1階へ寮の階段を降りていき…

そして、たわいもない会話をして笑いながら

「庭吉ー！」
にわよし

「ひッ…！」

二人で歩くと突然、後ろからよく聞き覚えのある声に呼び止められる。

その声に、自身に馴染ませようとしていた日常にパキッとヒビを入られた気がして…

身体が無意識にグツと力んだ。

そんな俺の様子を知ってか知らずか、隣にいた咲奈が後ろを振り返る。

「二階堂…！」
にかいどう

彼の呟いた人の名前に、ああやっぱり、と身体が強張った。
二階堂先輩が走り寄ってくる足音が聞こえて、おずおずと後ろを振り返る。

「…先輩」

「おはよー！」

「おは、おはようございます」

昨日の出来事のせいか、いつもより上機嫌な先輩が俺の前まで駆け寄ってくる。

まだ昨日の事に対して頭の整理ができていない俺は、先輩のテンションに戸惑ってしまう。

「学校、一緒に行こう！」

「あー…はい」

「なんだ？元気がないぞ庭吉」

「や、そんなことはないですよ、ええ、はい」

正面から俺の目をまっすぐ見つめている先輩からあからさまに視線を逸らして答えると、にこにここと無駄に爽やかな笑顔を浮かべていた先輩の顔がどんどんむくれっ面になっていく。

「あーウソだ、彼氏にウソ付いたら駄目だろー？」

「う、嘘なんか…ていうか彼氏って…」

「一週間だけでも彼氏に変わりはしない！」

「うっ…で、でも…」

頬を膨らませながらじりじりと詰め寄ってくる先輩に困っていると、咲奈が飽きた様に助け舟を出してくれた。

「オラてめえさっさと歩け、朝メシ食う時間なくなっちまうだろーがよ」

「あ、そうだな！庭吉、一緒に食べような？」

「は…はい」

先輩は俺の返事を聞いていたのか聞いていないのか、自分が話し終わると「さあ！」と笑って先頭を歩き出した。

前を歩く先輩をなんとなく目で追いかけながら、咲奈と並んで後を歩く。

「お前…二階堂のテンションについてけんの？」

「…まず無理だろうね」

「おいおい」

「ま、まあでも一週間付き合えばわかってくれるって」

俺の方を向いて心配してくれる咲奈に苦笑いでそう答えると、咲奈は少し口を引き結んで、かすかに聞こえる程度の声で呟いた。

「どーだか…な」

第5話 二階堂先輩とは？（前）（後書き）

更新が遅れたので分けただけです、すみません；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1746k/>

とびらの前で

2010年10月11日01時58分発行